妻

Washington Irving, “The Wife”

翻訳：今福　千裕

圧倒的な不運に見舞われても耐え続けるといった、女性の不屈の精神に感心することがよくある。精神を打ち砕くような悲惨な出来事に遭うと男は塵の中に伏してしまうが、女はその全活力を呼び起こし、自分たちの性質に剛勇さと気高さを与える。時に、それは最高潮にまで高められる。女性を、弱々しく壊れやすい女性を見つめること以上にいじらしいことはないだろう。女性は総じて虚弱で、依存的で、どんなささいな乱暴に対しても敏感なのだ。人生が順風満帆な間でも、突然、精神を高め、夫の不幸に寄り添い、慰める必要に駆られても、苦虫を噛みつぶすような災難を尻込みすることなく断固とした態度で耐え抜くときでも、実に健気であるのだ。

蔓は、しとやかな群葉をオークに長く結い合わせ、日の光に抱かれるときも、強固な植物が落雷によって切り裂かれようとも、絡みついた蔓はしがみついて離れず、なおも砕け散った大枝を包み込むようだ。女性は、幸福な時は男諸君に依存し、ただお飾りに成り下がっているだけかもしれないが、苦しい時には男の支えとなり慰めとならなければならない。男の心の奥の荒れた部分も包み込み、そのうなだれた頭を優しく支え、その壊れた心を抱きしめるのだ。これは神意に基づきながらすばらしく整然とした、女性のあるべき姿である。

私は以前とある友人に祝詞を述べたことがあるが、彼は幸せな家庭を持ち、家族は互いに強い愛情で結びついていた。「今以上の幸運に恵まれようなんてできないさ」と彼は熱心に言っていた。「妻と子供を持てること以上の幸運なんてね。君が幸せだって時には、その喜びを分かち合える人がいるってことだよ。もしくは、君を慰めてくれる人がね」実際、私としても、いざ不幸に陥った時に世間での立場を取り戻すのが、独身の男よりも結婚している男の方がよくやれるというのはわかっている。一要因として、男性に生活の全てを依存している、頼りなく愛すべき家族のために努力しなければと掻きたてられるからだろう。しかし、主な原因は、男の精神が家族の愛情によってなだめられ、かつ和らげられるからだ。また、男の自尊心が家族の承認によって保たれるからだ。世間が邪悪で屈辱的であったとしても、家に帰れば愛しの家族との小さな世界が待っているのだから。そこでは夫が一番偉いのだ。一方で、独身の男は自暴自棄になりやすい。配偶者がいないため、自分は孤独で世界から見捨てられていると思い込み、その心は、さびれた舘のように壊れゆく。

以上の見解は、私が以前目にしたことがあるちょっとした家族の小話から思いついたものだ。親しくしているレズリィという友人がいるが、美しくしっかりした女性と結婚した。その女性はいわゆる都会っ子という感じだった。彼女は富にそこまで恵まれていた訳では無かったが、私の友人の方は裕福だった。友人はすばらしい楽しみとして彼女を甘やかし、性の魅力を振りまく繊細な嗜好や趣味を手助けできるという期待の方に胸を躍らせていた。「あの子の人生を、」友人は言った。「おとぎ話のように美しくしてやるんだ」

性格の大きな違いは、調和のとれた絆を生む。友人の方はロマンチストで真面目だが、彼女の方は活発で気の良い人だ。友人は一緒にいる彼女を見つめるとき、黙ってはいるものの内心有頂天になっていると感じることが多々あった。彼女の活発さが彼女の喜びにつながる様子を見つめているんだ。そして拍手喝采の中心に立つと、彼女の瞳は友人の方に向く。まるで彼女が探し求めている愛を持ち受け入れてくれる者がその人しかいないかのように。彼女が友人の腕に寄りかかると、そのほっそりとした体が背丈のある友人の男らしい体格と見事に対比されている。甘く打ち解け合う中で、彼女が友人を見上げる様は、勝ち誇ったような自惚れと愛情をこめて大事にしているかよわさに赤面しそうになるようだった。友人は愛すべき悩ましいその頼りがいのない姿に惚けているみたいだ。彼らほど幸福に満ちたすばらしい期待をはらんでいるよくできた結婚式の花道を歩く二人はいないだろう。

財産をなげうって大きな賭に出たのは友人にとって不幸の始まりだった。友人は結婚して数ヶ月しか経っていなかったのだが、度重なる災難のせいで、自分の財産のことが頭から払い落とされていたのだ。そして自分が貧乏に成り果ててしまっていることに気づいてしまった。一時はその状況を隠していたが、顔はやつれ、心は壊れていった。彼の人生はただ苦痛だった。そして生活をより耐えがたいものにしたのは、妻のいるところで笑顔を見せ続けなければならなかったことだ。というのも彼女に今の近況を知らせて悲しませるなんてことは友人にとって我慢ならなかった。しかし、彼女は友人の様子を見るなり、ぼろぼろになってしまった彼に対して愛情深い眼差しを向けた。友人の変わり果てた姿と苦しそうな息づかいに気づき、快活に見せかけようとする弱々しくつまらない試みに騙されたりはしなかった。彼女はその元気と柔らかく優しい言葉をもって、友人が幸福を勝ち取れるように努めた。しかし、彼女はただ彼の魂に矢を突き刺しただけだった。友人が彼女を愛するようになればなるほど、彼女をすぐにみじめな状況に陥れてしまうのではと感じて苦しんだ。もうしばらくもしたら、彼女の頬から笑顔が消え去り、歌が口元から失われ、悲しみとともに目の輝きがなくなり、胸の中で今軽やかに脈打つ幸せな心が、世間においての不安と惨めさできっと私のようにやつれてしまうだろうと思ったのだ。

ある日、友人がようやっと私のもとを訪れ、深刻に絶望したような声で現状を語ってくれた。その話を聞いたとき、私はこう尋ねた。「奥さんはこのことを全部知っているのかい？」すると友人は苦悩にまみれて激しく泣き出した。「お願いだから！」彼は叫んだ。「俺を哀れんでくれるって言うなら、もう妻について話してくれるなよ。あいつについて考えると俺はおかしくなるんだ！」

「どうしたんだよ」私は言った。「君の奥さんは遅かれ早かれ君の現状を知るはずだよ。いつまでも隠し続けるのは無理だ。真相は君から打ち明けるよりも驚かせるようなやり方で曝露されるかもしれないよ。愛する人の口から聞いた方が厳しい知らせも和らぐだろう。それに、君は同情してくれる彼女の慰めを自分の手で遮断してるんだ。それだけじゃない、考えや気持ちの無制限な交わり、すなわち互いに心を一つにできる唯一の繋がりを危うくしているんだぞ。あの子は君の心に巣くい苦しめている何かの存在にもうじき気づくだろう。

本当に愛してくれているのなら黙っていることを我慢しないさ。それでもなお君の悲しみを隠そうというのなら、軽く見られてると思って怒ってしまうだろうね」
「嗚呼、だが友よ！彼女の将来にどれほどの打撃を与えることか。君の夫は物乞いだなんて言ったら、彼女の心は地に叩きつけられてしまうよ！生活の優雅さも、社会の栄光も全て手放すことになる。俺と一緒に極貧と無名に落ち込んでいくだろう。彼女を今までいた環境から落ちぶれさせることになると打ち明けるなんて。知らなかったらずっと明るいまま振る舞えていたかもしれないのに。どうして彼女が貧困に耐えられるのかい？彼女は裕福で上品な中で育ってきたんだ。どうして粗末な扱いが我慢できるって？彼女は社会のアイドルなんだ。ああ、こんなのは彼女の心を壊してしまう。なあ、そうだろ」
　彼の悲嘆は雄弁であった。私は彼が言いたいように言わせた。言葉で吐き出したら、悲しみも和らぐだろうから。友人の発作が治まると、また黙って塞ぎ込んでしまうので、私は穏やかに元の話題に戻り、即刻彼女に事情を打ち明けるべきだと諭した。友人は悲しげに、しかしはっきりと首を振った。
「でもどうやってあの子に隠しておくつもりなんだい？あの子はこのことを知る必要がある。そうしたら現状を打破できる一歩をきっと踏み出せるよ。君は自分の生き方をどうにかすべきなんだって。いやそれだけじゃない、」私は友人の顔に移ろう苦しみを見つめた。「これ以上自分自身を痛めつけるなよ。君は見せかけの幸せの中にいたわけじゃないだろ。友が、暖かい友達がいるじゃないか。そいつらは君が立派な家に住んでいなくなったって悪くは言わないよ。素敵な邸宅なんてきっと必要ない、メアリーとならさ」
「彼女といれば俺は幸せだ」友人は叫んだ。「掘っ建て小屋でもな！彼女と一緒なら落ちぶれても、貧乏で埃まみれになっても平気だ！俺だけなら、俺だけなら、おお、神よ！彼女に祝福を与えたまえ！彼女に幸運を！」彼は悲痛と柔弱さに打ちひしがれて泣いていた。
「なあ、僕を信じてくれよ」私は立ち上がり、彼を自らの手で優しく包んだ。「信じてくれ、あの子ならこれまで通り君と接してくれるよ。いやそれ以上だ。今の苦境はあの子の誇りと勝利の源泉になるだろう。彼女の内なる力と熱い思いやりの心がそこから呼び起こされるんだ。君を君自身として愛していると証明できることなら喜んでやってのけるんだからね。全ての忠実な女性の心には燃えさかる天の火の煌めきが宿っているんだ。それは人生が成功の光で満たされている時には眠っているが、不運に見舞われた陰惨な時には熱く燃え上がり閃光を放つんだ。男は愛すべき妻がどれほどのものか真にわかってはいない。どれだけ救いの天使であるのかを。この世の業火に焼かれるような苦難に妻とともに直面するまではね」
　私の熱心な態度と巧みな言葉遣いには、レズリィの興奮した想像力に訴える何かがあった。というのも私はこの聞き手の扱い方は心得ていたから。そして与えた影響を徹底させるために、私は彼に家に帰って妻に悲しみを打ち明けるように説きつけた。
　これだけのことを言ったにも関わらず、私は自分の言葉に一抹の不安を抱えていたことは白状しておこう。誰が栄華の中でしか生活したことがない人の堅実さを推し量れるだろ

うか？もしかしたら友人の妻の精神は、突然指し示された陰鬱で下り坂の道を嫌悪するかもしれない。今まで浸っていた日の元に執着してしまうかもしれない。その上、上流階級での破滅には数多くの苦々しい屈辱が伴う。他の階級の者には無縁のものだ。要するに翌朝レズリィに会うのに、私は狼狽を隠せなかったのだ。でも彼は話してくれた。
「それで奥さんはどうだった？」
「まるで天使さ！むしろ心から安堵しているように見えたね。彼女は俺の首に腕を回して最近不幸そうだったのはみんなこのことだったのかと聞いてきたよ。だけどかわいそうなことに、」友人は付け加えた。「彼女は俺たちがどれだけ落ちぶれないといけないかはっきりわかってないみたいだ。貧乏についてまるでわかってない。あるのはぼんやりとしたイメージだけ。それも詩にでてくるようなやつさ。そこでは愛の同義語みたいに扱われてる。未だかつて彼女は窮乏を感じたことはないんだ。慣れ親しんだ便利さや上品さをなくしたことがないんだから。実際に俺たちがさもしい心配事を経験するとき、ちょっとしたもののわずかな屈辱に直面してからが本当の試練だ」
「でもね、」私は言った。「今君は、奥さんに事情を打ち明けるという一番つらい仕事を乗り越えたんだ。今度はなるべく早く世間に秘密を明かした方がいいよ。明かすのは痛ましいかもしれない。だけど少しの苦しみだからすぐに和らぐさ。打ち明けていないままなら、先行きを考えて毎日毎時間苦しむことになるだろうね。没落した男を本当に悩ますのは、貧困ではなく見せかけだ。自尊心と空っぽの財布との葛藤だ。中身のない外見を維持することだ。そんなものはすぐに終わりを迎えるのだ。哀れでも堂々とする勇気を持て。そして貧困のもつ一番鋭い針を抜いてしまえ。」この時、私はレズリィが心の準備を完全に整えているのを察した。彼は過ったプライドをもう持ってはいない。彼の妻に関しても。ただ変わりゆく運命に適応できるかを気にかけているだけなのだ。
　数日が経った頃、友人は夜に私を訪ねてきた。友人は今まで住んでいた家を片付け、町から数マイル離れたところにある田舎に小さなコテージを設けた。毎日家具を移送するのに忙しくしていた。新しい建物にはいくつか家具が必要だった、もっともシンプルな類いのものだ。前の家の派手な家具は、妻のハープだけ残してみんな売り払ってしまった。これらは自分たちの愛のささやかな成り行きに結びついているという妻の意向に則ってやったんだと友人は言った。というのも、求婚期間の二人の甘い時間の大体はその楽器にもたれかかって過ごし、そのとろけるような声に耳を傾けていたのだ。妻を溺愛する夫のこんなにもロマンチックな武勇伝を聞かされて、私は笑みを溢してしまった。
　現在友人はコテージに移住し、彼の妻は終日家具の配置を管理している。友人の家庭の物語の進行に私は強く関心を持った。そして心地の良い夜だったので、私は友人に一緒についていきたいと申し出た。
　その日友人はひどく疲れ果てていて、歩いている途中、発作的に憂鬱な思いにふけってしまった。
「かわいそうなメアリー！」長い沈黙の後、彼は重いため息とともに吐き出した。

「どうしたんだ？」私は聞いてみた。「あの子に何かあったのか？」
「何って、」友人はいらいらした視線を投げた。「このしょぼくれた状況になって？みすぼらしいコテージに囚われ、惨めな住まいでの卑しい日々で茨の道を余儀なくされることが何でもないと言うのか？」
「彼女はそうなって文句を言っているのかい？」
「文句だって！彼女はただ優しく快活でいてくれてるさ。実際、これまでに見たことがないくらい元気そうなんだ。彼女はこんな俺のために持てる全ての愛情と優しさと慰めを注いでくれてるんだ！」
「なんて立派な子だ！」私は驚嘆した。「君は自分のことを貧しいと言うがね、これ以上望めないほど豊かだよ。でも、このような女性を手にできる素晴らしさ以上の財産を持つことはできまいよ」
「ああ！だけどね君、最初にコテージに足を踏み入れたときに、俺は快適に過ごせると思ったんだ。でも彼女にとっては初めての肌で感じる体験なんだ。粗末な家に踏み入れたばかりなんだ。みすぼらしい家具を整えるのに毎日苦労しているよ。彼女は初めて家事の大変さを知った。初めて自分の身の回りにきらびやかな調度品がなくなっているのを目の当たりにしたんだ。便利さもね。今頃疲れて元気をなくし、これから先続いてく貧しさを思い詰めながら、座り込んでしまっているかもしれない。」
　空想はありそうなことに思えたので、私も否定することはできなかった。二人は黙って歩いた。
　大通りを逸れて狭い小道に入った。そこは木々に分厚く覆われ、世間から隔絶されているようだった。私たちはコテージが見えるところまで来た。その外観はどんな田園詩に描かれているものよりも地味な様子だった。心地よい田舎のような見た目だ。野生の蔓が葉をいっぱいつけて片側を覆っていた。いくつかの木々がその枝を優雅に投げ出していた。ドアの周りや正面の芝生には趣味よく花の小さな植木鉢が置かれていた。小さなくぐり戸が、ドアに続く低木の植え込みの中をうねるように通る小道に付けられていた。コテージに近づくと、私たちは歌が流れてくるのを耳にした。レズリィは私の腕を握った。私たちは立ち止まって聴いた。それはメアリーの歌声だった。非常に感動的で素朴なその歌声は、彼女の夫が特に好きだったメロディーを口ずさんでいた。
　私の腕の上でレズリィの手は震えていた。彼はよく聴くために前に進んだ。砂利道の上だったので足音がした。すると朗らかで美しい顔が窓の外を見やり、姿を消した。軽やかな足音が聞こえてきた。私たちの元にメアリーがぱたぱたと駆け寄ってきた。かわいらしい田舎風の白い服を着ていた。彼女の綺麗な髪には野花の髪飾りがついていた。頬はバラ色に輝いていた。そして満面の笑みを浮かべていた。私はこれほど愛らしい彼女を見たことがなかった。
「親愛なるジョージさん、」彼女は声高に言った。「帰って来てくださって嬉しいわ。ずっと待っておりましたの。小道を走ってあなたが見えないかと探していたんです。コテージの裏

にきれいな木が生えておりましたので、その下にテーブルを並べておりますわ。とってもおいしいいちごも採ってきましたの。あなたがお好きですから。素敵なクリームも添えておきましょう。ここはほんとに気持ちよくて静かなところですわ！」彼女は友人の腕に自分の腕を絡め、晴れやかに彼の顔を見上げた。「さあ、きっととっても楽しいに違いないわ！」

哀れなレズリィは圧倒されていた。妻を胸に抱いた。堅く抱きしめた。何度も彼女にキスをした。彼はしゃべることができず、大粒の涙が目から溢れ出ていた。そして、裕福になって生活が実際に幸福なものになっても、今以上の幸せに恵まれることはありえないと何度も言っていた。